

「千代田」の「強み」はこれだ！

会長 鈴木 精成

記録的な猛暑も終わり、秋の訪れを肌で感ずる候となりました。「銀漢声無く玉盤を転ず」（「中秋の月」蘇軾）の一節が味わい深く感じられます。

この夏、私どもはお二人の幹部吟友の突然の訃報に接しました。酒井帆風先生と大熊龍清先生です。酒井先生は平成十六年の神田教場新宿分室設立以来、指導者として抜群の力を発揮され、会員拡充への熱意とキメ細かな教場運営で

会員を指導して来られ、加えて千代田岳精会副会長としても多大な貢献を果たしていただきました。一方、大熊先生は千代田（当時は教場）発足時からのメンバーであり、丸の内第一教場の第三代教場長として地道なご努力をいただくとともに、平成十九年一月から廿一年十二月まで千代田岳精会の副会長として会躍進の牽引役を担っていただきました。お二人を失い、会としても痛恨の極みですが止むを得ません。心からご冥福をお祈り致します。

今年度の総本部一大事業として進められている「吟魂燃ゆ」への、磯田精信先生との共同原稿の最終校正を過日終えましたが、その原稿に取り組む中で「千代田」の歴史を再確認するとともに「千代田」の強みについて考えました。詳細は「吟魂燃ゆ」に譲るとして、思うところを認めます。

昭和六十年四月、飯田精鷹先生（初代会長）のもと十人に満たぬ仲間が集まったの教場スタートでしたが、その後の足取りは素早く、力強いものでした。総本部直轄の「千代田教場」から「千代田支部」へ、そして「千代田岳精会」への昇格のスピードは予定を遙かに上回る足取りで進行して参りました。その間に新しい教場の開設が続き、今日に至っております。

これまでの「千代田」の歩みを振り返ってみま

すと、夫々の教場が積極的な吟友呼びに努め教場活動を進めてきた事（「千代田の縦系」）と共に横断の諸研修、階層別研修・自主研修会等（「千代田の横系」）が活発に展開されてきていることに強みがあると思います。

このような活動を推し進めているのは会員お一人、お一人が抱く強い役割意識とそれを支える多様な能力の発揮です。教場でも、自主研修会でもそれが見事に展開されています。

来年の「千代田岳精会創立三十周年」記念大会への準備が目下「企画委員会」のもとで進められています。その活動に於いても委員をはじめ関係者方の絶大な力が生かされています。計画が着々と具体化しつつある中で関係者への働きかけ、それに呼応する各位の積極姿勢、この行動はこれまでの会設立以来、千代田の吟友が培ってきたものだと思います。一層の取組推進がカギです。最近の新聞コラム欄で興味ある一文を読みました。私どもが吟詠の大切な「生命」としている母音についての話題です。かの有名な一句「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」（芭蕉）を精査すると十七音の内「い」音が七。蝉の声に擬したこの音が効果を高めているとの学者の指摘ありとのこと。この学者のもう一つの指摘では「夏草や兵どもが夢の跡」（芭蕉）には「お」の連続があり、その「お」は古より「悲しい音」なのだとのこと。母音の芸術“として吟詠に取り組む私どもに何かと示唆を覚えます。

院吟日本流精岳

ちよあ

第 5 2 号

平成 2 7 年 9 月
千代田岳精会弘報

平成廿七年岳精流指標
日に新たに

横山岳精 吟道八十周年

横山精真 宗家就任十周年記念



全国吟道大会 開催

今年 は 家元・宗家お二方の節目にあたる記念大会でした。特に九十八歳になられた家元の八十周年は、昭和初期に木村岳風先生に師事され、第二次世界大戦、敗戦後の荒廃と平和国家としての復興への取り組み、高度成長からバブル破綻と近代日本史の足跡そのものです。

わが千代田では、地元で岳精流を支える会として全員でお祝いしようと最大の二五三名が出席申込をしました。当日の役割として犬飼堯山事業部門リーダーのもと進行係に加えて舞台係、記録担当の広報など多くのご来賓、遠来の会員が気持ちよく大会を楽しんで頂けるよう裏方としても汗を流しました。

当日朝は、梅雨の晴れ間と雨の心配の無いなか全国から集う会員の姿が川崎駅から続き、貸切バスから降りる方々で開扉前から溢れていました。記念大会を祝い（公財）日本吟剣詩舞道振興会菅原雪山会長をはじめ吟界を代表する流派の宗家・家元の方々が出席され、数多くの最高の吟詠を一堂に拝聴できる得難い機会は私達にとり密度の濃い貴重な一日でした。

会員合吟での登壇では、千代田男女共に舞台一杯に並び、女子は質、男子は量で会を盛り上げま

した。

第五部の特別番組、第七部の構成吟「日本讃歌」では華麗な剣詩舞も加わり、家元のテープや流統の幹部が登壇し、岳精流の高いレベルと会員の団結力が披露されましたが、さらに整然とした大会運営や会員のマナーは、終了後ご来賓方から称賛の声が多く聞かれました。

（内容は「龍吟」八月号に記載しましたので
ご一覽下さい）

初参加者の感想



全国吟道大会に参加して

新陵 青木 美憲

会場に着くと想像以上の人の数に圧倒され、岳精流が全国規模に発展されていることを実感致しました。

今回の大会には、千代田岳精会男子合吟の一員として参加させて頂きましたが、参加というよりも壇上で演じられる見事な吟を拝聴させて頂いた一日でありました。

その中で感じましたのは、日頃私が先生から指導を受けております吟の基本を完璧に修得された方ばかり（当たり前前のことですが）だということ

とでした。節調もさることながら、やはり発声を正しく力強く出来ない、こういった舞台には出られないの दौरानと痛感した次第です。今後ともこの点を頭に置いて練習に励みたいと考えております。

全国吟道大会感想

新宿第二 青山 昇平

「あさみどり」の季節を迎えた、私にとって初めての全国吟道大会。期待は勿論、不安も色濃くありました。もしや「からまつ」の林のように長い吟の披露が延々と続き「時に憩う」閑もなく「わが胸の」脆弱な吟心が音を上げてしまうのではないかしら？

しかし、一たび幕が上がってみればそんな不安など嘘のよう。家元や宗家をはじめとする諸先生方の名吟の数々に唯々心震えました。まさに「春ここに」到来したかのような優美さあり、まるで「月を観て感有」ることくの閑雅あり。このような興味を理解できる「日本人」に生まれて本当に良かった！「日本を愛す」る気持ち自ずと胸に迫りました。嗚呼「日本讃歌」！

気が付けば「春夜洛城に」聞く「笛」の音のよいうなイビキをかく心配もすっかり忘れておりましたとき。

全国吟道大会に参加して

生田 飯島 けさ子

記念すべき全国吟道大会で家元の元氣なお姿、

お声を拝聴でき、また宗家の朗々とした張りのある美声が胸に響き感動しました。

舞台上で吟詠する諸先生方の背筋をしつかり伸ばした姿勢の良さ、これこそ腹から声が出せるんだなと思えました。男性の袴姿、女性の揃いの着物が共にきりりとして眼に映りました。吟と舞の競演が素晴らしかったです。また尺八伴奏がとても耳に心地良く響き素晴らしい音色でした。

詩によっては中央でスポットライトが当たって顔が見える時があっても良かったかな?と思えました。舞も目を見張るものがあり、只々素敵でした。

入会して半年足らずの未熟な私が舞台上上がり、合吟ができて感動です。七時間余りの世界に疲れも感じませんでした。素晴らしく楽しい記念すべき大会でした。初めての詩吟の世界でした。

初めての全国大会

ハザマ支部 上田寿美江

詩吟を学び、初めての大きな大会で自分も合吟に参加するということで期待して当日を迎えました。全国各地から参集された緑の着物と黒い略礼服の人の群れが印象的でした。

出番となり「春夜」を合吟しました。私自身は一部足並みが遅れ、練習不足を反省した。事前に受けた菅原先生の研修は素晴らしく、刺激的でした。登壇前に練習は一回だけでしたが、四々五回練習したかった。チームでは天童と三河が上手だと感じました。もつとも出番の準備で席を温め聴

いていられなかった。コンクール優勝者や招待吟詠は素晴らしく感銘を受けた。仕事の都合で午前の部しか聴けず残念でした。

舞台までの階段の多さに驚いた。年配参加者には苦勞している方もおられた。出吟者には階段昇降の筋トレを推奨してはどうかと思いました。次回は充分練習し合吟に参加したい。

全国吟道大会初参加の感想文

中野 落合 正和

六月廿一日、全国吟道大会に初めて参加させて頂きました。全国各地の会員一六〇〇名が川崎教育文化会館に集結したのを見て岳精流の規模の大きさに大変驚きました。

また家元・宗家はじめ会長・支部長さん達の吟詠を聴いていると余裕をもって楽しみながら吟じている姿を見て、自分も早くこの様な気持ちで吟じてみたいと思いました。

昨年十一月に友人の紹介で中野教場に入会致しました。何も分からない私に、皆さんが親切に色々教えて頂き大変感謝しております。月二回、新しい吟題で学んでおりますが、徳本先生の褒め言葉についてその気になり上手く吟じようとか、テクニクをどう生かそうとか、失敗したらどうしようとか色々考えましたが、今はそういう思いは一切考えず、岳精会会詩「真善美」の精神に基づき詩吟修得心得を遵守して作者の詩心を良く理解し、その心を素直に吟じて行きたいと思っております。今後ともご指導の程よろしくお願いいた

します。

全国吟道大会に参加して

中野 金井 俊夫

初めて吟道大会に参加し、感動しました。

今年の大会は家元・宗家の記念すべき年の大会ということで例年と相当趣向が違ったと先輩諸氏から伺いました。特に構成吟を企画し、それぞれに趣向を凝らし、バリエーションも豊富で初めて見る私にも退屈させないものでした。これは私だけでなく、私の近くにいた幼稚園生と思われる子供も食い入るように見て身体でその感動ぶりを表現していました。自然と身体が動いて周りにも和やかな雰囲気醸し出し、良いものは子供にも感動を与えるものだと感じました。

さらに私の先生など身近な方が壇上で披露されると日頃の鍛錬ぶりが覗かれ、聴く方も一段と力が入り自分の練習の目標にもなります。吟と剣舞の組合せも良かったと思います。これからも今大会を参考にし、練習に励みたいと思いました。

大会初参加の感想

新陵 木戸 彪

開館前の会場周辺には各々グループ毎に集まって本番に備えての練習に余念がない人達も見られ、ざわめきと熱気が感じられる。

然しひとたび「真善美」の唱和、続いて岳精会会詩の全員吟詠が始まるや、場内は厳粛な場面へと一変する。

第四部以降は大先輩の先生方の凜乎とした素晴らしい吟詠で、自分は洗耳恭聴すること頻り。構成吟「日本讃歌」は構成の巧みさに感心するも、殊に吟の迫力とその美声に只ただ圧倒され聴き惚れる。自分も当流派の一成員である事に誇りを覚えると共に、詩吟への意欲を新たにしたい。有難い至福の一日であった。感謝！

全国吟道大会に初めて参加して

桜ヶ丘 高汐 一枝

私は今年初めて全国吟道大会に参加しました。詩吟の全国大会とはどんな感じかと、私のイメージは全国の会・支部の人が集まり合吟の発表会をするだけの会だろうと思っていました。が全く違う会で驚きました。

会場に着き、早速練習している会の人達もおり人の多さに圧倒され、自分の顔がどんどん引きつり緊張してきたのが分かりました。トイレに行く。と又々女の戦いかと思うくらい、鏡の前でメイクをしている人、着物の帯を整えている人、トイレを待つ人でごった返され自分の全国大会への冷めた思いに恥ずかしさを覚えました。

合吟では一人ひとりが一生懸命に吟じているのに心を打たれ、構成吟では詩吟の奥の深さを学び、宗家・先生方の吟では鳥肌が立ち感動を覚え会が終わりました。

全国大会を終えて、自分の中で何かが変わった。それは、詩吟は吟ずることだけではないということです。全国の岳精会の会員の思い一つひとつが

大きな一つの思いとなり、私もその小さな思いの一つとなり、全国吟道大会を終えて岳精会に入会したと実感した大会でありました。

詩吟漬けの一日

草加 田中 信行

詩吟には一年前までは全く興味ありませんでしたが、昔の会社の同僚がやっていること、クラスメートからの誘いもあり、草加教場に入会しました。草加教場は岩崎精慶先生、太田龍翠教場長のご指導によるアットホームな雰囲気でご入会しています。教室終了後は毎回中華料理店でビール、紹興酒を傾けながら和気藹々とした反省会、世間話で盛り上がっています。

さて全国吟道大会ですが、当日は小雨まじりのなか川崎駅から徒歩で会場に到着。会場は既に満席で「一吟入魂」の垂れ幕のもと岳精会会詩の大合吟が始まるうとしていました。第一部の合吟では小生の一番は最後で、千代田の参加者の多さに驚かされました。横廿五名の五列で、舞台に移動するのが大仕事でした。鈴木会長の先導で「名槍日本号」を声一杯吟じました。少壮吟士吟詠、招待吟詠の諸先生方、特に女性の吟には聴き惚れてしまいました。

構成吟「日本讃歌」の先生方の吟、剣舞、舞の華やかさ、格調の高さに大いに感動してしまいました。また日本近代史の一端をビデオを通しての紹介もあり堪能しました。詩吟漬けの一日“で

全国吟道大会 初参加

東陽町支部 土居 佳代

紫陽花が大輪の花を咲かせるこの季節、六月廿一日川崎教育文化会館大ホールで全国吟道大会が開かれ、私も初めて参加させて頂きました。今会は家元吟道八十周年、宗家就任十周年の記念大会、北は北海道から南は沖縄、全国から一六〇〇名余の方々が参加されました。

前半は会員合吟やコンクール優勝者吟詠、来賓吟詠。若い方は若々しい声で、年齢を重ねた人は深みのある声で、ホール一杯に響き渡る声に圧倒されました。後半はベテラン揃いの名吟、華麗な剣舞・詩舞、映像による吟と舞の競演。本当に素晴らしく感動し勉強になりました。

まだ仕事を続けながらの教室通い、今年の指標『日に新たに』。端正で語調の良いこの短い言葉を胸に刻み、昨日よりは良くなった“と少しでも思えるようにコツコツと努力し前に進んで行きたいと思えます。

全国吟道大会に参加して

神楽坂 浪久 雅子

初めて全国吟道大会に参加して、北は北海道から南は沖縄までの吟者の方々それぞれが合吟を熱心に、そして真剣に吟じられた事に共感を覚えました。

ご招待の来賓方の吟の素晴らしさ、我が岳精流

の先生方の素晴らしさを間近に聴けて本当に感激でした。

日の浅い私などは家元のお姿を見る機会など無いと思っておりましたので、家元のお話を聴き、不思議に涙が出るのを抑えられませんでした。吟道八十年本当におめでとうございました。

大会の中でも第七部の構成吟に感動です。なんとも素晴らしい世界でした。映像とマッチした心地よいナレーターの声に惹き込まれ、そして剣舞、詩舞を引き立てる吟の迫力は大きな会場に朗々と響きわたり、詩吟とはこういうものなんだよと教えてくれた気が致しました。ますます詩吟に魅了され興奮冷めやらず家路につきました。

全国吟道大会に参加して

中野 早川 滋

川崎市教育文化会館大ホールで開催された全国吟道大会に初めて参加させて頂きました。開場前から参加される方達の熱気を感じた次第でした。舞台上立った合吟では始める前に緊張を感じましたが、終わった瞬間に何とも言えぬ満足感を覚えました。

家元吟道八十周年・宗家就任十周年特別番組、構成吟等々の充実した企画で披露された吟・舞に接して大いに感動することが出来ました。

春の昇伝審査会

雅号を受けた方々のご感想



初伝審査を受ける

熊谷 奥野 陽泉

小林明風熊谷教場長から熊谷に教室を開くのと誘いを受けて入会し、早いもので三年二か月が過ぎ、毎年葉桜の時期に東郷神社水交会で昇伝審査が行われ、今年は雅号が認許される記念の年でした。

不安と緊張の中、初伝の指定吟題を詠じ終えた後はホッとしました。渡先生の講評を受け、無事に初伝審査に合格出来ました。うれしかったです。お忙しい折、熊谷の田舎まで来て下さり、入会から今日まで熱心にご指導をして下さった鈴木会長はじめ諸先生に感謝申し上げます。

詩吟を始めた頃は岳精流基本吟譜の発声方法の難しさや奥の深さに戸惑いを感じながらも、自分としては段々と吟が大好きになり、生活のリズムに組み入れ身近に感じる様になりました。

教養のない私ですが、少しずつ漢詩を理解していききたいと思います。まだまだ基本吟譜の発声が未熟ですので確りと勉強をし、口の開き方と言葉の歯切れを工夫したいと思います。簡単には出来

ないと思いますが、お腹に空気を一杯入れて腹式呼吸で大きな声を出す様にして声作りをしていきたいと思えます。これからは雅号に恥じない様にもっともつと吟と向き合い、精進しつつ吟の道を一歩一歩進んで行きたいと思えます。

いつも優しく、また明るく指導して下さいます諸先生方、仲間の皆様方に感謝しつつ、これからもどうぞ宜しくお願い致します。

「泉」をいただいて

熊谷 折川 華泉

詩吟は「腹式呼吸」で、健康の為と入会させて頂きました。継続して丸三年を経て、この度の「初伝」に挑戦させて頂きました。当日までも、順番を待つ間も緊張の中に居りました。「名槍日本号」を選ばせて頂き、渡先生からの講評を頂いた結果「泉」の号を戴くことが出来ました。これも小林明風熊谷教場長はじめ諸先生方のお蔭と感謝申し上げます。

月日を重ねるにつれ、呼吸の取り方、大きな声をお腹から出し、苦しくなっても途中で息を抜かず吟じきる等、吟の深さを、また難しさを覚えるようになって来ています。

年数を重ねると声に変化があり「張りつつや」が出るとお聞きしています。その内の「つや」がどんな感じか、はつきりと分らないのですが続けて行く中で分かるようになると思っています。今よりも進歩して行きたいと思えます。声の「つや」を求めて健康であり続けられるよう、生かさ

れている時を楽しんで行きたいと思えます。
これからも先生のご指導を宜しくお願い申し上げます。

初伝審査に合格して

逗葉 神谷 知泉

この度、無事初伝審査に合格させて頂き、まことに光栄に存じます。ここに入門当時からご指導を頂いた故大槻鉾風先生及び徳本先生をはじめ、諸先生、諸先輩の方々のご指導に対し心より厚くお礼申し上げます。

私は以前から漢詩には興味があり、折に触れて接して参った者ですが、詩吟を始めてから更に漢詩が身近なものになってきたことに喜びを感じております。また、詩を暗譜して吟じることが漢詩の中にいっそう溶け込ませてくれるようで、大変に感慨深いものがあります。一方、詩を吟ずるようになってから声の出方がかなり楽になってきたと実感しております。

今後とも出来る限り数多くの漢詩に接し、その詩情を味わいながら吟じて行けたらと思っております。

発声こそが吟詠の命

神楽坂 久保 洞泉

人知れず湧き出ずる

洞窟の泉のごとくに

平成廿三年の暮れ、勝村忠山教場長の二年越しの熱意に負けて詩吟という未知の世界に飛び込

みました。あれから足掛け四年、手探りで右往左往しながらも「詩吟」から人生の大切なものの多くを学ばせて頂きました。そしてこの度、念願の初雅号をいただき感無量です。

思えば、入会直後に購入したディスク「詩吟ベスト」の冒頭にあった吟「芳野懐古」を拝聴し感銘と感動を受け、終生忘れ得ない私の宝物となりました。その吟詠をされた先生が奇遇にも我が岳精流の横山岳精家元でした。

発声こそが吟詠の命

無謀にもこの「芳野懐古」を二年後のコンクール初挑戦で吟じました。見事に落選しました。

私の人生での三回目の落選体験でした。一回目は早稲田大学初の受験、二回目は東京都議会議員選挙初挑戦、そして三回目がこの「芳野懐古」への挑戦でした。

この落選で私は「最良」を学びました。吟詠の真髄は一に発声、二に発声、三はなくて、四はその他諸々と。

音読学習器で発声勉強

脳は自分の声が好きです。ところが、自分の声は自分の耳には一〇%位しか届きません。最近「音読学習器」を活用して自分の声を一〇〇%耳に戻すことで発声勉強に役立てています。お蔭で一〇kg以上も痩せて、メタボ症候群を脱して心身共に爽快です。

最後に、一生で一番大切な心身の健康を与えてくれた詩吟に感謝し拙い私の言を閉じます。有難うございました。

石の上にも三年

丸の内支部 中島 義泉

この度の昇伝審査において、晴れて初伝に認許され雅号「泉」を賜り身の引き締まる思いです。平成廿三年十月に縁あって詩吟と出逢い、良き吟友の方々に恵まれ楽しい環境下で今日まで詩吟を継続することが出来ました。

入会早々に開催された「千代田岳精会」の二十五周年記念大会での諸先輩達の詩吟に大きな感動を覚え、いつの日か人に感動を与える詩吟を自分も吟じたいと決意したことがつい先日のような気がします。その様に感じる事は、ある意味では詩吟を介して楽しい時間を過ごすことが出来たことの証であると言えらると思えます。

「石の上にも三年」の諺がありますが、諸先生方のご指導のお蔭で私なりに少しは詩吟らしく吟じることが出来るようになった気がします。しかし目標には遥かに遠く、吟の難しさに挫けそうになる昨今です。

今回の初伝の認許を契機に初期の目標である「人を感動させる吟」に向かって心機一転チャレンジする所存であります。諸先生方の厳しいご指導と先輩及び同僚の吟友の方々のご鞭撻を宜しくお願いします。

雅号の重さを感じつつ

丸の内支部 長谷場 純泉



高校の大先輩のお誘いにより、丸の内支部教場の末席に加えて頂いてから早くも四年余が経過しました。この間には体調不良などもあつて教場を長く欠席させて頂いたり、自宅近くの鎌倉教場にお世話になったりの四年間であります。

そんな中、この四月十九日に四度目の昇伝審査を体験することになりました。当日、会場では定刻に審査が始まり着々と吟の順番が進む内に胸の鼓動が昂かまり、絶句しないかを秘かに心配しながら自分の番を待ちました。

そして受審。今回は指定吟の「名槍日本号」に挑戦し、最後まで無事吟じ終えることが出来て内心ホッとしました。審査の佐藤精堂先生からは、意外にもお褒めの言葉を戴いた上に「山」の発声についてご指導下さるなど、大きな感激がありました。

申請伝位が初伝であつた今回は雅号の「泉」が授けられることになりました。吟の西も東も理解出来ていなかった私がこのような榮譽に浴すことが出来るのは岩崎先生、山口先生をはじめ諸先生方の丁寧で熱心なご指導と諸先輩や吟友の皆様方の温かいご支援のお蔭と心から感謝申し上げます。

雅号を頂くことになりましたが、私にとって吟の難しさや奥深さには依然として大きな戸惑い

があります。頂いた「泉」の重さを自覚しながらこれからも精一杯努めて参りたいと思っております。皆様、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

暗譜で挑戦しました

ハザマ支部 三島 寿泉

自信の無いまま早くも四年目となり、初伝審査となつた。毎度口の開きの悪さ、大きく開けてとの指摘・指導を受けており発声練習では自覚して口を大きく開けていても吟詠となると相変わらずである。節調においても、あでもない、こうでもないと迷いの連続であり、大呼吸も充分でない。そんな状態での審査であつたが、暗譜で挑戦することにしました。

結果、自分自身としては比較的巧く吟ずることが出来たように思う。

この合格で雅号「寿泉」を戴いて前向きに精進いたしたく、ご指導の程お願い申し上げます。

雅号「泉」をいただいて

熊谷 山上 香泉

今日は少し早く家を出て、明治神宮を参拝。木々の雄大さ、参道へ続く長い砂利道を歩きながら心静めて臨んだ昇伝審査。諸先生方のご指導のお蔭で初伝、そして雅号を頂くことができありがとうございました。

思えば平成廿三年三月十一日、忘れられない日となつた熊谷分室の発会式。式典の最中のあの東

日本大震災、交通手段が全て無く、ホテルもとれず我家（越谷）へ帰ることが出来ず、諸先生と一緒に小林教場長宅へ泊めて頂いた事、あれから四年目を迎えます。

大きな声を出しての練習、そして詩吟の素晴らしさを身をもって感じる日々です。これからも「真善美」の精神を忘れず、私の一生の友となるように努力していきたいと思ひます。吟友と共に頑張りますので、宜しくご指導をお願い申し上げます。

初伝審査に合格して

丸の内支部 笠 泰泉

板橋桜泉さんにお誘いを頂き、早や四年が経過しました。（感謝！）

「貴方の吟は機関車が走っているみたいだね」声だけは人に負けないようにと力んでいた頃を懐かしく感じます。やがて自らの声の震えに気付きました。テープを聞いてもみても半端じゃありません。生まれてこの方、人と異なる発声をやつて来たんじゃないかと不安にもなりました。数々ご指導を頂きましたが良く理解できぬまま、ええい、腹から声を出せと自らに言い聞かせているこの頃です。

仕事柄、車を使うことが多く運転しながら大声で発声練習？をしています。対向車はあのオツさん何やってんだろうと思つているかも、ですが思い切り発声でストレスは発散し、満足感・充実感も感じ、仕事へのファイトも増してくるようです。

住所が桜ヶ丘教場に近く、入会以来同教場にもお世話になっていきます。教場長は私がコンダクターの練習をしているのに気付き、様子を見られていたようで「桜ヶ丘で弾いてくれない？」と声をかけて頂きました。軽い気持ちでお受けしたので、これが初心者には大変。会員さんの伴奏をやるのに必死の思いで練習することになりました。でも、有難いことに自らの音程の狂いやアクセントも何となく理解出来てきたようです。

石の上にも三年。ここまででは誰でもが来られる段階でしょう。これからは研鑽がなければ進歩がない領域。先生方や諸先輩のアドバイスを大切に一層の精進に励みたいと思います。

タージマホール 星野久風（清水）

第四十七回

全国吟剣詩舞道連盟 武道館大会

千代田男子チームが出場申込みをして、女子も総本部女子チームへ十名が参加予定の今年の大회는、今年から幾つかの新しい内容が加わり、十一月七日・八日の二日間で開催されます。

七日 十五時三〇分開館

・全国コンクール幼年、青年部優勝者披露

○特別企画吟剣詩舞「兜」演技

八日 十時三〇分開館

・合吟コンクール（六十二団体申込）と入賞団体表彰

○全国地区連絡協議会推薦、吟剣詩舞七チーム演技

・吟剣詩舞幼年二地区四チーム演技

・高校生代表吟剣詩舞演技

・全国コンクール一般一、二、三部優勝者披露

（○は新しい内容）

岳精流からは、六チームが参加申込みをしており、千代田としても悲願の優勝を目指して、毎月二回の猛特訓を重ねています。

なお、千代田男子が出場する八日は開館時間の変更で、早朝の靖国神社集合練習は行いません。出場者には改めて通知されます。



教場呼称変更及び人事

◇教場呼称

・「丸の内第二支部教場」を「丸の内支部教場」とする

・「新宿教場」を「新宿第一教場」とする

◇人事

・総務部門リーダー 出水田 鶴山

副 〃 菟場 一山

・新宿ブロック長 出水田 鶴山

副 〃 橋本 淳風（留任）

・新宿第一教場長 加納 隆山

副 〃 加納 隆山

〃 代行 橋本 淳風（留任）

〃 代理 岡部 禎山

副 〃 加藤 有風（留任）

・新宿第二教場長 出水田 鶴山

副 〃 手塚 勝山（留任）

・新宿第三教場長 宇田川 静泉

〃 補佐 細田 和子（留任）

・銀座副教場長 増子 梨山



酒井前新宿ブロック長を悼み 新体制スタートのご挨拶

新宿ブロック長 出水田 鶴山

酒井帆風（繁行）氏は平成廿七年五月三十日急性心筋梗塞で急逝しました。（享年七十七歳でした）

心臓に持病があったとはいえ、あまりにも突然の死でした。新宿ブロックのメンバー一同はショックと驚きを隠せませんでした。勿論、千代田岳精会、岳精流日本吟院総本部の幹部の方々も驚きは大きかったと思います。

彼は新宿ブロック長、新宿教場長、千代田岳精会では副会長、総務部門リーダーを務め、岳精流総本部の研修運営部長、「吟友の輪（ともものわ）」第三次プロジェクトのメンバー等々、幅広く活動していました。

新宿ブロックでの酒井氏のプレゼンス（存在）は非常に大きなものでした。ブロック、教場を取りまとめること、しっかりとした吟の指導、会員増強への強い志向、例えば彼の信州の母校・飯田高松高校の同級生六人を一気に勧誘して、新宿第三教場を立ち上げたり、大学の、会社時代の友人を多数誘い新宿の会員を増やしました。（私もその誘われた一人です）

昨年、吉祥寺で宗家を講師に招き、開催された

「詩吟公開講座」は彼が先頭に立って準備に携わり多くの人を集め、大成功を収めたことを思い出します。

新宿教場長としての酒井さんは、指導に熱心のも度々でした。時には厳しい言葉も出ました。しかしこの世に居なくなつた今、飲み会で「酒井さんが居ないのは寂しいね」と唄われています。飲み会文化が盛んな新宿グループではよく居酒屋に集まりビール、ワイン、焼酎、日本酒を楽しみ、吟のこと、教場の在り方、世間話等談論風発です。彼もよく飲み会に参加して、好きな「マツカラン」のオンザロックを嗜んでいました。

この世のことは「始めがあれば、終わりあり」で彼はさつさとあちらへ行きました。残された我々はしばし呆然自失、右往左往していましたが全身全霊を傾けて新宿ブロックを引っ張ってくれた酒井さんに申し訳ないと、有志で集まり話し合った結果、不肖出水田がブロック長を引き受け、橋本淳風、加納隆山が副ブロック長。教場長は宇田川静泉を加え、四人の新しい体制でスタートしました。酒井さんが強く望んでいた五〇人支部教場を目指して頑張る所存です。

酒井さん、本当にいろいろ有難う御座いました。安らかに眠って下さい。ご冥福を心からお祈ります。

前後になりましたが、千代田の皆様、どうか私達にご支援、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「新会員紹介」



◇丸の内支部教場

川口 隆夫氏（六月入会）

古屋利泉さんに勧められて、詩吟に初めて出会いました。声が出ず不安ですが、楽しみに変えて声出しに励み、人生の楽しみにします。有難うございます。

◇丸の内 桜ヶ丘教場

大森 尚美さん（四月入会）

我が子の成長に刺激され、私も新しい事に挑戦！と思っていた時に縁あって岳精会に入会しました。詩吟の奥深さに触れ、出来るか不安にもなりましたが、我が子に負けず私も詩吟を勉強して成長したいと思えます。

小倉 とし子さん（四月入会）

詩吟は三十年も前から習いたいと思っていたが、敷居が高く思いが届かず、友人の福井澄泉さんに誘われ入会致しました。腹の底から声を出す事は苦手な私ですが、時間をかけ楽しみながら、稽古のみと思っています。

◇丸の内清流教場

中井 武典氏（一月入会）

かねて昵懇の加藤雅巳氏のご紹介で、本年初めに入会いたしました。存分に声を発すれば心身健康に、且つ古の詩人の心にも触れることが出来、その奥深さを感じています。七十の手習いですが、諸先輩の驥尾に付して精進したいと

思います。

◇清水 中野教場

金岡 博人氏（五月入会）

友人の湯浅和泉氏の紹介で入会致しました。腹の底から大声を出すことは気分爽快で健康にも良いと思つて始めました。教場では村上先生、徳本先生の暖かいご指導のもと、楽しく学ばせて頂いています。諸先輩の皆さま、宜しくお願ひ致します。

◇神田教場

久保 正義氏（六月入会）

年下の私に弟の様に接してくれる平井茂行氏に誘われ神田教場を見学した。吟礼に続き、発声、当日の吟題の合吟、独吟と進められる。詩吟が初めての私とつて吟礼は新鮮であり、神圣な魂を覚醒させる実感があつた。私の故郷の長野県千曲市は川中島合戦の地、教場で正統な吟を習い、いつの日か上杉の軍陣妻女山、武田の軍陣八幡原で吟友と合吟したいと願つてゐる。

◇ハザマ 生田教場

中村 龍一郎氏（四月入会）

はじめまして中村です。二反田奉泉さんの紹介で見学に来て、呼吸法の一つでもあると聞いて健康管理の一環として入会しました。大声を出す機会も少ないので、ストレスの解消にもなるかなと思つて吟じています。今後ともご指導をよろしくお願ひします。

三島 悟氏（六月入会）

五月から始め、詩吟のイロハも分からぬ身、井田教場長はじめ先輩の皆様方の暖かい指導を頂きながら見よう見まねの教場通い三か月。音は外れる、伴奏は耳に入らない、声は途切れる等々苦戦の日々ですが、お腹から大きな声を出し、詩を吟ずることの楽しさを回を重ねる毎に感じるようになってきました。基本を学びながら焦らずに精進したいと思ひます。



訃報記事

◆酒井 帆風氏（副会長・新宿教場長）

平成廿七年五月三十日逝去されました。享年七十七歳 総本部役員、千代田岳精会副会長、新宿教場長として会員増加、教場の発展に多大な功績を残されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

◆大熊 龍清氏（顧問・丸の内第一教場長）

平成廿七年六月十三日逝去されました。享年七十七歳 会草創期の会員の一人。会顧問、

丸の内第一教場長としてご活躍されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

七十年前の暑い暑い八月十五日、二か月前六月十九日の福岡空襲の被害を免れた自宅で終戦の玉音放送、詔勅を聴いた。焼夷弾の落ちる中を逃げまどつた恐怖、沖繩の陥落、特攻隊、広島・長崎の特殊爆弾（と当時説明された）の大惨事、いずれ米軍が進攻すれば戦場となり、戦つて死ぬと国民学校四年生の軍国少年は覚悟していた。

玉音放送の内容はよく判らなかつたが、父から「天皇陛下は国名を残すか、国民を残すかで国民を選ばれた」との説明を今も克明に記憶している。

将来について全く展望がなく、暗澹たる思いのなかで、戦争で死ぬことは無くなつたと気持ちが見るようになったことを焼け跡に立った十歳の少年は安堵の中で感じていた。

同年代の孫達には思いもつかないだろうし、絶対に経験させたくない。

今年の全国吟道大会でも、中国大陸で従軍し、戦傷された九十八歳の家元のご挨拶の中で平和への思いが込められていた。

今に生きる我々、戦を知っている戦中派、残された人生を如何に生きるかを、夏が来る度に自省しています。

千代田としてもかけがえのない幹部を二人失いましたが、歩みを止めることなく前進を続けたと思ひます。

今号も数多くの寄稿を頂き、有難うございました。

(八田)